



## ハラールの夢想

エチオピア東部の都市ハラール。ジュゴルと呼ばれる城壁の中は毛細血管のように細い小道が張り巡らされている。私は迷路のような、ハラールの城壁内をぶらぶらさまようことが好きで、すでに4度もこの街を訪れた。小道を歩き交うソマリ人、オロモ人、アムハラ人、ハラリ人の女たちの色とりどりの装束と宝飾がまぶしい。80以上存在するといわれるモスクから流れるアザーンが幾重にも重なり軽い眩暈<sup>めまい</sup>を覚える。石畳の端々に掃き溜められた果物の皮、肉屋に吊るされた牛肉、鼻腔に侵入してくる唐辛子などのスパイス。様々な色と音と匂いに彩られた密度の濃い空気にどっぷりつかると。

日が暮れる。この街の奥底には深い祈りとともに、何か得体のしれないものが潜んでいるような気配がある。閉店した食堂のラジオからクルアーン<sup>クルアーン</sup>の詠唱が流れてくる。しばらく立ち止まり、そのやわらかくまるやかな声の陶醉に聴き入ると、数匹のハイエナの遠吠えがクルアーンに絡んでくる。店の前には老人が寝転び、布で体を包み、嗜好品植物のチャットを嘔みながら、クルアーンに合わせて何やらぶつぶつうめいている。

フランスの詩人アルチュール・ランボーは、19世紀の終わりにこの街に住みついた。ランボーは、詩を書くことを止めて商人としてハラールに住んでいたという話がよく知られているようだ。しかし彼はハラールで、ほんとうに詩作から離れたのであろうか。彼はこの街に住むようになって間もなく、自らのポートレイトをいくつか撮影し、故郷の親族宛に送っている。ひょっとすると、彼はハラールで、詩そのものになったのではないだろうか。それを今でいうところの“セルフィー”に収め、永遠に向けて、解き放ったのかもしれない。などと、とりとめもない夢想をいだきながら、店々の軒先に垂れる裸のランプのかすかな灯りを頼りに、さらにこの街の奥深く、潜行していくのである。

### かわせ・いつし

映像人類学者。国立民族学博物館准教授。  
アフリカ、主にエチオピアの楽師、吟遊詩人の人類学研究を行う。近著に『ストリートの精霊たち』(世界思想社、2018年)。

